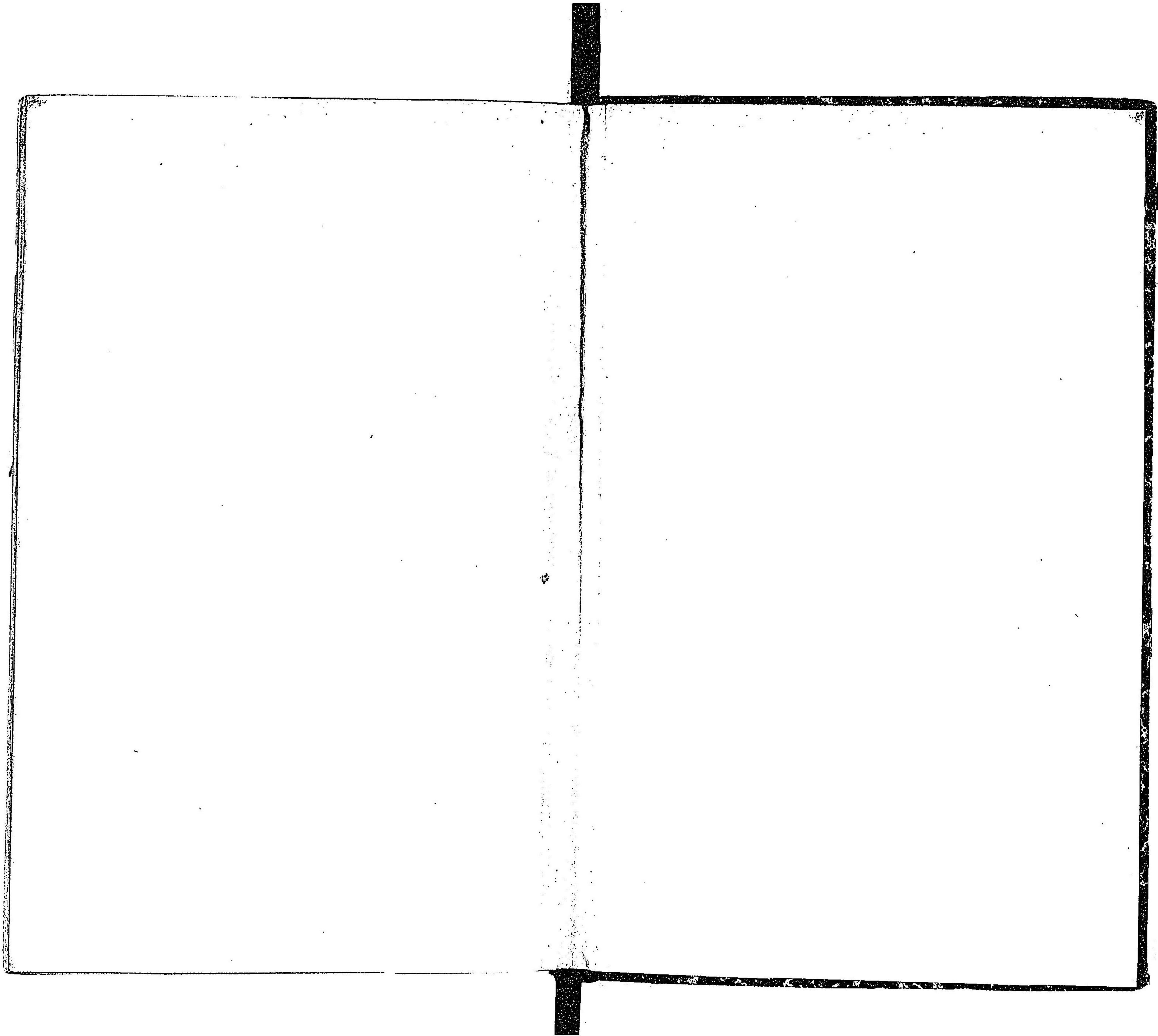
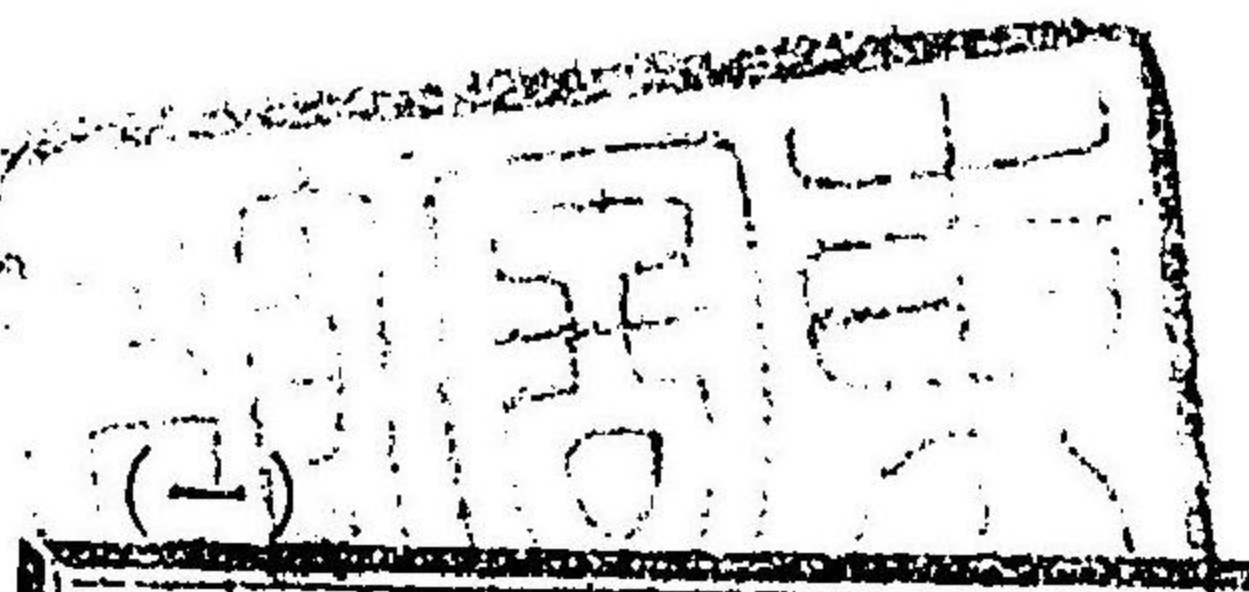


25

48

為
文
戰
條
規
燭
以
議





緒言

弱ハ強ノ肉トナル古今同シ今ヤ歐洲大國ニ於テ或ハ東洋ニ志アルモ
 ノアリ或ハ其他ノ小國ヲ併セント謀ルモノ實際ニ之レアラントス今
 ニシテ之レニ備フルハ最モ地球上民人ノ幸福ト云フベシ今日日韓紛
 議ノ結果彼レ我レヲ暴撃スルニ至ツテ朝野ノ論士進ンテ之ヲ討ント
 議シ退テ亦爲スアラント論シ其言ヤ未タ一定セサルモノ、如シ故ニ
 必ラズ戰ヲ開クヘキヤ又談判上彼レ我レニ要求スル事ニ至ルヤ是亦
 未タ知ルカラスト雖モ抑モ日韓ノ事タル東洋政略ニ關シ其影響ハ
 實ニ大ナルモノト謂フヘシ因テ若シ其處置宜キヲ失セバ或ハ他トノ
 一太戰爭ヲ開クニ至ルナキモ保セス蓋シ斯ノ如キ場合ニ當テ必要ナ
 ルモノハ此ノ交戰條規ノ實施ニアルカ歐洲諸國既ニ此ノ企テアリ事
 未タ實施ニ行ヒスト雖モ其文案討議ノ記事ヲ集メテ有志者ノ參考

(二)

トナスハ亦タ無益ニアラザルベシ世界萬國此法一度ビ行ハルレハ弱
ハ強ノ肉タルコトナリ道理ニ據テ之ヲ處スルニ至リ其至公至明ナル眞
ニ萬國ノ幸福ト云フヘキナリ

明治十五年八月

編者識

萬國公議交戰條規

目次

一般ノ章程(五節)

第一部 論敵國權利

第一篇 敵國其占據シタル地方ニ施行シ得ル兵權(八章)

第二篇 戰者ト稱スヘキ者ノ種質ヲ論ス

戰者不戰者ノ別(二章)

第三篇 敵ヲ賤フ兵器ニ正不正ノ別アルヲ論ス(三章)

第四篇 攻圍並ニ燒打ノ事(四章)

第五篇 論間諜(五章)

第六篇 論軍虜(十四章)

第七篇 不戰者及傷者(七章)

(三)

目次畢

第二部 戰者ノ權ノ平民ニ關セルモノ

第一篇 平民ニ關セル戰權(七章)

第二篇 賦金課役(三章)

第三部 交戦者ノ通交

第一篇 通信並ニ停兵ノ旗章(六章)

第二篇 降伏(一章)

第三篇 停兵(七章)

第四篇 強償(三章)

附

討論

參考戒嚴令

萬國公議 交戦條規

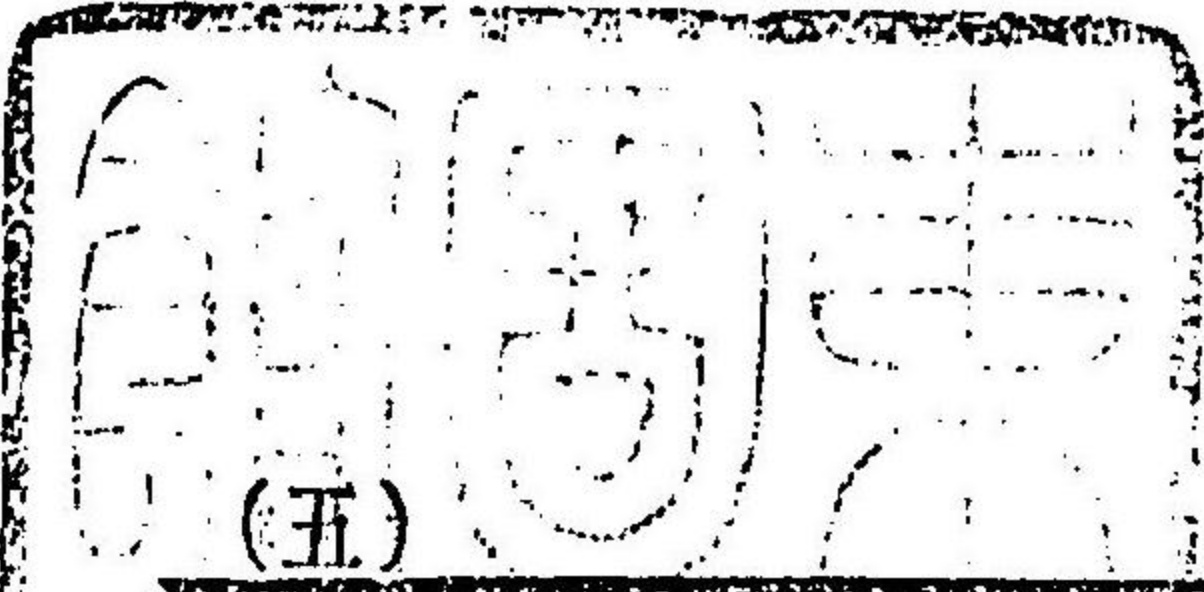
大谷熊太郎編纂

交戦條規ヲ議定セン爲メ各國ノ全權使比利時ニ會集ス

其全權使ノ姓名

萬國公議交戦條規會議ハ魯西亞帝ノ企ニシテ比利時ノ京都^{ベルジ}比律悉ニ於テ開ケルモノナリ此日比利時外務卿アスブレモレリンドンデル氏主席トナリテ各國ヨリ委任ヲ受ケテ此會議ニ出張シタル全權使ヲ接待セリ而シテ此會議ノ統領ハ魯國外務官員シヨミニニ氏ニテ各國ノ全權使ハ左ノ如シ

魯西亞	兵學教授陸軍少將	レヤル氏
日耳曼	陸軍少將	ホソツブ氏
英吉利	陸軍少將	ゴルスホルト氏
佛蘭西	外務官員	マーチ氏(ヘル氏)
澳地利	陸軍少將	パロンブーデ氏
	全權公使	アルノドイ氏
	兵學教授陸軍將	コントホテツキ氏
		ミユインホルト氏



交戦條規一般ノ章程

瑞典 全權公使陸軍大佐
 西班牙 海軍將
 伊太利 全權公使陸軍將
 土耳其 軍務委員陸軍大佐
 希臘 陸軍兵學頭
 希臘 陸軍將
 比利時 土工兵長陸軍大佐
 比利時 外務省書記長
 此餘荷蘭瑞西等ノ諸國ヨリ出席ノ全權ハ其名ヲ畧ス而シ
 今直チニ條規全文ヲ左ニ記シ了リテ遂ニ會議ノ模様及討
 論ヲ記スベシ

ハムマ氏
 ペスウエルラ氏
 プランツ氏
 ランツア氏
 ガラチオドリ、エフエンシ氏
 エデヘムパシア氏
 マントス氏
 モケル氏
 バロンランツレモイ氏

一節 兩個ノ獨立政府或ハ他國合同シ或ハ合同セサル共

一般章程 五節

交戦條規

ニ等シ互ニ其規律正シク編制シタル兵馬ヲ以テ相争フヲ
 稱シテ公戦トス

二節 戰爭トハ偏ニ敵國ノ兵ニ向テ戦フニテ其平民ノ如
 キハ兵仗ヲ帶ビテ之ニ加ハルニ非サルヨリハ措テ問ハス

三節 出師ノ本意ヲ達セント欲スル爲ニ交戦條規ニ違ハ
 サル一切兵器ヲ用テ相戦フハ互ニ相許ス所ナリ抑モ交戦
 ノ條規ニ於ケル管ニ殘忍無道ノ所業ヲ相禁ズベキ而已ナ
 ラズ犯ス者アル時ハ雙方共ニ捕テ之ヲ罰スベシ但シ戰時
 退引ナラズ緊要ノ折柄是非無ク斯ル所業ニ移リシハ此例
 ニアラズトス

四節 戰時ノ緊要ナリトテ故意ニ返忠ヲ謀ラシメ或ハ一
 切殘忍暴虐ノ所業ヲ施行スルヲ得ズ

論敵國權利

敵國其占據シ

タル地方ニ施行シ得ル兵權

敵將ノ兵權

五節 今度ノ公議ニ於テ確定シタル交戰條規ヨリ甲ニ於テ犯スキハ乙モ亦其強償トシテ之ヲ犯スヲ得ベシ然レモ是ハ固傲尤ノ所業タルヲ熟考シテ人道ノ至要タルヲ忘ルベカラズ

第一部 論敵國權利

第一篇 敵國其占據シタル地方ニ施行シ得ル兵權

第一章 甲モシ乙領ノ一部ヲ占據シタル時ハ其土地復乙ノ支配ニ非ズシテ甲ノ軍務ノ支配トナルモノナリ

第二章 甲若シ乙領ノ一部ヲ占據シタル上ハ我軍務上ニ對シテ要川ナル爲メ又ハ其領地人民保安ノ爲メニ其土地ノ舊法章ヲ存スルモ變スルモ廢スルモ共ニ隨意ナリトス
第三章 敵將ノ兵權ハ其占據セシ土地ノ諸高官又ハ庶務

官吏又ハ司法役員又ハ邏卒等ヲシテ每事己ノ監督ヲ經テ事ヲ執ラシムルヲ得ベシ

第四章 兵ノ權利上ニ於テ其占據セシ土地ノ高官ヲシテ其新領者ノ許ニ立テ其職務ヲ執掌スルノ口證口上ニテ請合フヲ云ヲ要シ得ベシ又其庶務ノ官吏誓ヲ立ルヲ拒ム者ヲ貶斥シ

又ハ一旦立タル誓ヲ破リタル官吏ヲ罰スルヲ得ベシ
第五章 敵兵ノ權利ハ其占據セシ土地ノ人民ヨリ其故政府ニ收納シ來リタル一切ノ租稅及財布ヲ我方ニ收納セシムルヲ得ベシ

第六章 敵兵ノ權利ハ其占據セシ土地ニアル故政府附屬ノ貨財武庫一切運輸ノ器什儲倉輜重及一切武備ニ供スル政府所有品ハ悉リ収メテ以テ我有ト爲スヲ得ベシ(餘論)車

戰者ト稱スヘキモノ、種質

類并ニ鐵道ハ私有ニ係ルモ取上得ベシ又私有ノ兵器類モ亦一切取上ケ得ベシ

第七章 敵地ニ占據シタル兵ハ其地ニアル官府ノ建棟類并ニ林木等ヲ用ユルヲ得ベシ

第八章 敵兵ハ其占據セシ土地ニアル寺院附屬ノ品物ヲ始トシ其他學校藝術場人民救恤ノ爲メ建置タル館社ノ附屬品物ヲ取上ルノ權利ナシ若シ此權利ヲ犯シテ之ヲ取上ケ或ハ其他諸種ノ像塑類及ヒ藝術上ノ製作品及博物館等ヲ破毀スル者ハ兩政府ニテ罰セサルヘカラス

第二編

戰者ト稱スヘキ者ノ種質ヲ論ス

戰者不戰者ノ別

第九章 戰者ノ權利ヲ有スヘキモノハ特ニ正兵而已ナラ

戰者ノ權利アル者

雜兵

戰者不戰者

ス臨時自投ノ兵ト雖モ次ノ目標トナルヘキ者アルモハ皆戰者ノ權利アル者トス

一節 重立タル政府ノ投人ノ指揮ヲ爲ス者又ハ陸軍ノ將士アリテ之ヲ指揮ヲ爲ス者

二節 遠方ヨリ認め易キ目標ヲ帶フル者

三節 公然兵杖ヲ帶フル者

四節 戰鬪ノ際軍律ヲ遵守スル者 右ノ四節目ハ一モ欠クベカラサル者

但シ單ニ兵器ヲ携フルノミニシテ以上四ヶ條ノ目ニ從ハサル雜兵ハ之ヲ戰者ト看做サス故ニ之ヲ擒ニシタル

時ハ軍務裁判出張所ニテ取扱フ者ナリ 是レ戰者ノ權利ヲ扱ヲ受ル能ハザルナリ

第十章 正兵中ニ就テ戰者不戰者ノ別アリ戰者トハ現ニ

敵ヲ戕フニ兵器ニ正不正アルノ別ヲ論ス

交戦ノ際禁スルモノ

軍器ヲ携テ交戦スル者ヲ云フ不戦者トハ隊中ノ俗務ヲ司ル者ノ類ヲ云フ此不戦者ノ虜ニ就クヤ戦者同様ノ權利ヲ有スルナリ軍醫及教官ハ中立無關係者トス

第三篇

敵ヲ戕フ兵器ニ正不正ノ別アルヲ論ス

第十一章 敵ヲ戕フ爲ニハ何種ノ凶器ニテモ用ヒ得ルト云フハ交戦條規上ニ於テ許可セサル所ノ者ナリ

第十二章 右ニ基キ下ノ條々ハ交戦條規ニ於テ禁制スル所ノ者ニ係ル

(甲)毒ヲ含メル武器及ヒ敵國中ニ迄傳播スル毒藥

(乙)無道ニ敵國ノ人民ヲ殺害スル事

(丙)兵器ヲ投シテ降りタル敵或ハ身ヲ防クノ武器ヲ持セサル敵ヲ殺ス事通例敵ハ必ラス懲殺スルト云フ布告ハ

交戦條規上ニ於テ施行シ得ル條款

戦者ノ權利内ニアラス特ニ彼方ニ斯ル暴虐ノ行アルハ其強價トシテ我方ニテモ施行スルヲ得ヘキノミ我方ニテ彼ヲ怨スルコトナキ者ハ我方ニ向テ我ヲ怨センコトヲ請フテ得ス

(丁)敵城ノ堅守抗戦スル者ヲ援シ爲メ其守兵ヲ懲殺無遺ト聲言スル事況ンヤ之ヲ懲殺スルヲ蓋シ城ニ懸テ堅ハ之ヲ援ニハ力ヲ以テスヘク虚聲ヲ飛シテ其報國ノ良心ヲ空シク損傷セシムヘカラサルヲ云フ

(戊)無益ニ人ヲ苦マシムル武器譬ヘハ銃丸中ニ玻璃ノ粉屑ヲ混テ敵ヲ打ツ等ノ事

(己)量目四百グラムニ滿タザル破裂丸ヲ用フル事

第十三章 交戦條規上ニ於テ施行スルヲ得ル條款如左

(甲)所謂バルチサン一時烏合ノ雜兵^{ソカール}博徒又獵師等自ラ隊ヲ結テ交戦ニ加入ス

交戰中敵ノ形勢等ヲ探偵スル種々ノ手段ハ許スモ敵ヲ騙カスヲ禁ス攻圍並ニ燒打

者ナル者大小ヲ問ハス皆之ヲ戰爭場ニ用ルヲ得ル事
(乙)敵國所領ノ地ニ諸稅ヲ課シ又ハ敵勢ヲ強スルノ用ニ供スヘキモノハ之ヲ廢毀スルヲ得ル事

(丙)攻撃ノ妨トナルベキモノハ毀ツヲ得ル事
(丁)戰爭上ノ詭謀ヲ用フルヲ得ル事然レモ就裡敵ヲ驅カ

ス爲ニ敵ノ國旗又ハ敵兵ノ記号又ハ軍服等ヲ用フル輩擒ニ就ツキハ戰律保護ヲ失フ者也故ニ殺害セラル、共
(戊)敵ノ形勢及地位ヲ探索スル諸種ノ手段ヲ施スヲ得ル

事

第四篇 攻圍並ニ燒打ノ事

第十四章 攻圍ナル者ハ砲臺或ハ砲壁ヲ備ヘタル城市ニノミ施スヲ得ヘシ砲壁ナキ都邑ハ其人民兵器ヲ携テ自ラ

間牒ヲ論ス

防リニ非サルヨリハ其地ヲ燒打スルヲ得ス

第十五章 砲壁ナキ地ト雖モ軍卒或ハ兵仗ヲ帶ヒタル住人之ヲ防禦スルキハ之ヲ燒打スルヲ得ヘシ但シ然ルキハ前以テ其旨ヲ其地ノ長官ニ告ケサルヘカラス

第十六章 砲壁アル城邑ヲ燒打敵將ハ其地ニアル寺院工藝ノ品物博物館等及像塑像等ヲ云フ大小學校及人民撫恤ノ爲ニ建タル屋宇病院幼稚園等ヲ破毀スルヲ禁止スヘシ

第十七章 攻取タル城邑ニ於テ什物ヲ分取スベカラス私者ヲ云フ

第五篇 論間牒

第十八章 間牒ナル者ハ敵ニ我形勢ヲ報知スル人ヲ云フ
第十九章 証人ノ目前ニテ捕ヘタル間牒ハ勿論假令ヘ其

使務ヲ未タ遂ケサル間牒ニテモ捕ヘテ之ヲ軍務裁判所出張所ニ送致ス

第二十章 我カ攻取タル土地ノ人民我カ形勢ヲ敵ニ報知スル者ハ何人ヲ問ハス捕ヘテ之ヲ軍務裁判出張所ニ送致ス

間牒ノ使務ヲ遂ケシ者

第二十一章 敵ノ間牒一旦其使務ヲ遂ケテ其隊ニ皈リタル者ハ後來我カ方ニテ擒ニスルモ其者ハ最早ヤ過去ノ責ニ任スヘキ者ニ非ス故ニ斯ル者ハ軍虜ニ屬シテ間牒ニ屬セス

公然ノ使ト間牒ノ別

第二十二章 戦争ノ周圍ニ入り來テ徘徊スル者アリ之ヲ捕ヘテ糺スニ全ク兵士タルノ証アル時ハ認テ以テ間牒ト爲スヲ得ス又兵士ニテモ兵士ニ非サル者ニテモ公然使ヲ

軍虜ヲ論ス

爲ス者ハ間牒ト看做スヲ得ス(譬ヘハ一隊伍ヨリ他ノ隊伍ヘ書翰又ハ届書ヲ持テ行ク使等はナリ)

(餘論)氣球ニ駕シテ信ヲ通スル者或ハ(諸隊ヨリ互ノ音信ヲ通スル爲ニ使ヲ奉スル者モ亦右ノ人物部類ニ入ルヘシ)間牒ト認ムルヲ得ス

第六篇 ミラクリソソル 論軍虜

第二十三章 戦者ニテモ不戦者ニ屬スル者ニテモ現ニ兵器ヲ帶テ正シキ兵隊即チ第二編第九章及第十章ニ陳スル所ノ列ニ入りタル者ハ之ヲ擒ニスルヲ得但シ第六編第三十八章ニ陳スル者ハ此例ニ非ス

第二十四章 敵兵ノ側ニ徘徊スル者モ之ヲ擒ニスルヲ得ス然レモ新聞紙ノ報知人又ハ軍隊附賣酒婦等ハ此例ニ

軍虜ハ殘虐ニ
取扱フベカラ
ス

非ス

第二十五章 軍虜ナル者ハ正シキ敵ニシテ罪人ニアラズ
軍虜ハ之ヲ擒ニシタル政府ノ取扱フ者ニシテ其之ヲ擒ニ
セシ兵卒或ハ其隊伍ニテ隨意ニ取扱フヲ得ス而シテ渠ヲ
殘虐ニ取扱フハ交戰條規ノ許サ、ル所ナリ

第二十六章 軍虜ハ或ル公用ニ使役スルヲ得ルト雖モ渠
ヲ疲勞セシメ或ハ渠ノ敵軍中ニアリシ時ノ位階等級ヲ辱
シムルニ當ル役ヲ司ラシムルヲ得ス將公用ト稱スルモ渠
ノ本國ニ敵抗スルニ當ル事柄ニ使役スルヲ得ス

第二十七章 軍虜ヲ要シテ我戰爭上ノ干役ニ從事セシム
ルヲ得ズ

第二十八章 軍虜ハ之ヲ擒ニセシ政府ニテ其存養什物ヲ

軍虜遁走スレ
ハ捕テ之ヲ殺
ス

附與セサルヘカラス其取扱方ハ雙方互ニ取極置リヘキナ
リ(舊ハ戰爭ノ際白旗ヲ建テ掛合置キ戰後互ニ交換シ或ハ
其入費ヲ戻入ル等)

第二十九章 軍虜ノ遁走スル者ハ捕テ之ヲ殺スヲ得然レ
モ遁走ヲ遂ケシ後再ヒ之ヲ擒ニスルモハ渠ヲシテ前責ニ
任セシムルヲ得ス只其警護ヲ嚴ニスルヲ得ルノミ

第三十章 擒ニ就クトキ無法ノ所業ヲ爲シタル軍虜ハ司
法省法律ニ照準シテ之ヲ罰スルヲ得ベシ但シ斯ル輩ハ醇
平タル軍事上ノ罪人ニ數ヘスシテ尋常ノ犯罪人ト看做ハ
ナリ

第三十一章 軍虜若シ一同ニ遁走セシヨリ謀リ或ハ土地
ヲ長官ニ對シテ一揆ヲ企ツル者ハ軍律ニ照シテ刑ニ處ス

第三十二章 軍虜タル者ハ其榮ノ爲メニ各其官位ヲ告ヘシテ之ヲ行フヘシ

第三十三章 軍虜ノ互換ハ交戦兩國互ニ爲ニ章程ヲ議定シテ之ヲ行フヘシ

第三十四章 軍虜ハ其本國法制ノ許ス所ナラハ口證ニヨリテ(口證ハ「ウルトラ」ニテ誓ハ其身ヲ決シテ逃遁スマシキ誓ヒ其身ノ自由ヲ得其敵對セサルヲ誓ヒ放還サル、ノ類)其身ノ自由ヲ得ルヲ得ヘシ其時ニ於テハ其自己ノ政府ト等シク其敵ニ對シテモ其言ヲ踏ミ其約ヲ遂サル可カラス

第三十五章 軍虜ハ強テ其口證ヲ成サシムヘカラス敵モ又此口證アレハトテ必ス其自由ヲ與ヘサル可カラスト云フニ非ス

第三十六章 口證ヲ以テ自由ノ准許ヲ得タル軍虜再ヒ兵ヲ帶ヒテ虜トナル時ハ又視テ軍虜トナサス故ニ其罪ヲ議スルハ軍事裁判所ニ於テスヘシ

第七篇 不戦者及傷者

第三十七章 僧侶及ヒ藥劑士ノ傷ヲ負フテ戦地ニ在ルモ其ノ其他凡テ醫療ニ從事スル者人ハ軍虜ト成スヘカラス而シテ其戰ニ與カラサルヲ以テ中立ノ權ヲ有スベシ

第三十八章 病者傷者ノ敵手ニアルモノ皆數テ軍虜ト中ニ入ルヘシ而シテ其看護ハセテウコムウエノシヨノ旨ト次ノ數件トモ照シテ之ヲハスヘシ

第三十九章 療病院假病館ハ之ヲ用ヒテ戰鬥ノ助トスル

時ハ又中立タルヲ得ス然レ唯衛兵番兵卒ヲ置テ之ヲ守レ
ハ以テ其權ヲ失ヘリトス可カラズ唯其衛兵番卒ヲ數テ軍
虜ニ入ルヘキノミ

第四十章 中立ノ權ヲ有セル人其護身ノ爲メ己ヲ得サル
事アリテ一時兵器ヲ取タルハ爲ニ其權ヲ失ナハス

第四十一章 交戦者ハ中立者ヲ助ケテ給祿ヲ其政府ヨリ
受ルノ妨ナカラシメ又々其不得已時ニ當テハ繰替渡スヘ
シ

第四十二章 敵軍ノ傷者快復ノ後其又軍務ニ堪サルヲ認
メタル者ハ國ニ皈ラシムルモ可ナリ其他ハ軍虜トシテ淹
留スル亦妨ナシ

第四十三章 不戦者ハ其政府ノ附與セル特別ノ徴兵ヲ各

戦者ノ權ノ平
民ニ關セルモ
ノ

シ必ス護身票ヲ所持スヘシ

第二部 戦者ノ權ノ平民ニ關セルモノ

第一篇 平民ニ關セル戰權

第四十四章 未ダ占據セサル地ノ人民其本國ノ防禦ノ爲

メニ兵ヲ取ル者ハ戰トナシ其虜タルヤ即チ軍虜トスヘシ

第四十五章 敵人既ニ占據セル地ノ住民其敵ニ對シテ兵

ヲ取ル時ハ以テ戦者トナサス故ニ軍務裁判出張所之カ罪

ヲ議スヘシ又數テ軍虜ニ入レス

第四十六章 時ニ兵ヲ帶ヒテ戰ニ與リ時ニ又皈リテ平和

ノ業ニ從事スル者ニシテ第九章ノ掲ル所ニモ適セサル者

ハ既ニ戦者ノ權ヲ有セス故ニ其虜タルニ及テハ軍務裁判

出張所ニ送ルヘキ者トス

第四十七章 敵人既ニ占據セル地タリトモ未タ敵國ニ合併セザル時ハ其地ノ住民強テ其政府ニ對セル戰爭ニ與ラシムヘカラス又此戰爭ヲ永クスヘギ事業ニモ與ラシムヘカラス

第四十八章 占據セル地ノ住民ハ其敵ニ服從ノ盟ヲ爲スヲ要セズ

第四十九章 平和ナル住民ノ奉致榮譽及所有ノ權ハ敵人ノヲ貴重シテ犯サズルヘシ

第五十章 占據セル地ノ諸種ノ私有物ハ不得巳時ニ非ザレハ敵人ノヲ貴重シテ犯スヘカラス

第二篇 賦金課役 レインシュンズコントリビューション

第五十一章 敵人ハ其占據スル地ノ住民ニ租稅ヲ賦シ或

交戰者ノ通交

ハ品物貨幣ヲ備ヘシムル等凡テ其本國ニ於テ軍事ノ爲ニ賦課スル所ノモノハ同リ之ヲ課スルヲ得ヘシ

第五十二章 進入ノ軍ハ其地ノ住民ニ課シテ軍中必需ノ諸品食料軍須衣服ノ如キ之ヲ資ルヲ得ヘシ然レモ如此ハ凡テ其價ヲ算シテ其品ヲ出セル人ニ附シ又ハ其高ヲ記セル落手證書ヲ與フヘシ

第五十三章 又其地ノ住民ニ課シテ金ヲ出サシムルヲ得ヘシ但シ之ヲ行フハ最モ不得止ノ時ナル歟或ハ罰金トシテ取立ル時ニ限ル可シ何レモ都督ノ命ヲ以テ之ヲ決スヘク且其住民ヲ害セサルヲ要ス而シテ其不得巳ニ依ルモノハ後日必ス之ヲ償還スヘシ

第三部 交戰者ノ通交 レインシュンズ

第一篇 通信并ニ停兵ノ旗章

第五十四章 敵人ノ占據スル地方ノ通信往來ハ斷絶シ唯其軍府ノ要トスル者ノミ其許可ヲ得ヘシ

第五十五章 中立國ノ公使領事ハ戰爭ノ支障ヲ爲サス其地ヲ退去セン爲メ交戰國ノ許可ヲ得テ通行スルコトヲ得ヘシ然レモ最モ不得已ノ時ニ於テハ其許可ヲ遲引シ適當ノ時ヲ待テ許可スルヲ得ヘシ

第五十六章 交戰國ノ一方ヨリ他ノ一方ヘ事ヲセン爲ニ來ル人鼓手喇叭手ヲ連レ白旗ヲ持テルモノハ其人不可犯ノ權理ヲ有スヘシ

第五十七章 停兵旗ヲ送ルト雖モ其軍ノ都督ハ何ノ故タルト其何ノ事タルヲ論セス都テ之ヲ受ク可キニ非ス敵人

降伏 停兵

第二篇 降伏

若シ其位地ヲ得ンカ爲メ停兵旗ヲ用ヒテ之カ助トスル如キ事アラハ其防キヲ爲スモ又都督ノ權ニ有リ
第五十八章 交戰中停兵旗ヲ以テ敵中ニ來ル者或ハ傷キ或ハ死スルモ敵方ニテ停兵旗ノ權理ヲ害セシトセス
第五十九章 停兵旗若シ其特別ノ利ニヨリ敵ノ動靜ヲ窺ヒ或ハ反背ヲ催スノ舉動アルヲ認メハ其不可犯ノ權ヲ失セルモノトスヘシ

第六十章 降伏ノ條款ハ戰者雙方ノ相議決定スル所ノ約ニヨルヘシ約一度ビ定ラハ雙方正シク之ヲ遵守スヘシ
第三篇 停兵
第六十一章 停兵ハ戰者ノ間ニ於テ時ヲ限り約ヲ立テ戰

停兵中ノ別

争ヲ休ムヲ云フナリ若シ此時限ヲ豫メ定サル時ハ何時モ
 隨意ニ再ヒ戦ヲ興スヲ得ヘシ但シ停兵ノ定規ニ從ヒ其再
 ヒ戦ヲ興ス事ヲ報告スヘシ
 第六十二章 停兵ヲ定ムルノ後ハ其禁許ノ細目ヲ議スヘ
 シ
 第六十三章 停兵ヲ別テ全特ノ二種トス全停兵トハ戰者
 兩國ノ戰爭ヲ全ク休ムルヲ云ヒ特停兵トハ交戰兩軍ノ一
 部分ノ間ニノミ行ル、所ニシテ即チ互ニ定タル土地ニ於
 テ而已行フ所トス
 第六十四章 停兵ハ其約ノ決スル時ヲ以テ始トシ其報告
 至レハ隨意ニ戰爭ヲ停止スヘシ
 第六十五章 占據セル地方ノ住民ニ通交ヲ許スル條款ハ

休戦ノ約ヲ破
ルキ

強償ハ最モ已
ヲ得サルキノ
ミ之ヲ行フ

凡テ結約兩國ノ意ニアルヘシ若シ約書中其如何ヲ明言セ
 サル時ハ凡テ戰爭ノ景况其權力ヲ存スルモノトス
 第六十六章 若シ一方ニ於テ休戦ノ條款ヲ破レル時ハ他
 ノ一方モ又其條款ヲ踏ムヲ要セス或ハ又直ニ戰爭ヲ始ル
 モ可ナリトス
 第六十七章 平民自己ノ意ヲ以テ休戦ノ約ヲ破ルモノア
 ル時ハ互ニ其官府ニ向テ其罪ヲ糾シ罰ヲ行ハシム事ヲ求メ
 或ハ其損害ノ償還ヲ請フニ止マルヘシ
 第四篇 強償
 第六十八章 強償ハ其最モ不得已ノ時ニ於テノミ人道ノ
 條理ニ註意シテ之ヲ行フヲ許ス即敵人萬國公法ノ許サズ
 ル所ノ方法ヲ用ヒ交戰條規ヲ破レルヲ認メタル時ニ限レ

リトス

第六十九章 強償ノ限ヒリスランド及ヒ其方法ハ敵人權理ヲ犯セルノ度ニ由ルヘシ過大ナルハ萬國公法ノ許サ、ル所ナリ
第七十章 強償ハ必ス其都督ノ命ヲ以テ而已之ヲ行フ可シ都督ハ其度ト其力ホルスヲ定ムヘシ

終

本文ノ註ハ譯者ノ加ヘタルニテ原文ニアラス
是レヨリ比律悉會議ヲ下ニ記スベシ

比律悉會議

會議ノ目的

今度比律悉ノ會議ハ直ニ萬國相據ルノ法律ヲ定ムル爲ニハ非スシテ現今開化ノ度ニ於テハ戰爭上ニ付キ所謂人道ナル者ヲ何程實地ニ施シ得ヘキカヲ共々ニ評議スル迄ニ

英及土耳其格ノ議員

テ止マル事ナリ何トナレハ今度各國ヨリ委任シタル議員ハソノ議スル所ヲ以テ萬國公法トシテ行フ程ノ全權ヲ有スル者ニ非サレハナリ故ニ將來歐州爭乱ノ際ニ臨ミテ遵守スヘキ公法ヲ議決スルハ後來ノ次會ヲ期スヘシ此次會ハ聖彼得堡ニ於テスヘシト云
會議中ニ各議員ノ論スル所多端ナリト雖モ各々ノ自國ノ利害得失ニ基ツクヲ以テ自然ト其國ノ大小強弱ニ從テ論趣ヲ異ニスル者多シ日耳曼議員ハ毎ニ強者ノ理ヲ主張シ第二等國ノ議員ハ多ク弱者ノ權ヲ防守スルニ注意セリ而シテ此會議ニ於テ始終眞面目ヲ以テ論シタルハ二等國ノ議員也英ト土耳其ノ兩議員ノ如キハ恰モ席上ノ飾リ物ニ比ヘシ唯員數ニ備ハルノミ英議員ノ口ヲ開キシハ諸君ニ

日耳曼ノ議員

ハ萬民ニヨリテ未タ暇ト認メラレタル公法ハ強テ御議論
 ナキ方ナラント云フ時ノミ共余ハ都テ口ヲ閉メリ土耳其
 ハ同シクコレヲ辭セサレハ英國ト土耳其トハ此後他國ト
 戰爭ノ節ニハ方今ノ開化ニ關ハラス往昔夷變ノ所置ヲ用
 フヘキ意裏ナラント推考スルモ亦其理ナキニ非ス○但シ
 土國ハ其後ハ調印シタリトシ
 議案ノ第一部第一篇ハ異議多クシテ終ニ決セス就中ソノ
 第五章ニ占據シタル者ハ其地ノ人民ヨリ其地ノ舊政府ニ
 納メ來レル物税人口税關稅ヲ取立ルヲ得ヘシトアルニ日
 耳曼議員ハ此他如此キ類ハ之ヲ取立ルヲ得ヘシト云フ意
 ヲ加ヘント主張セリ然ルニ二等國ノ議員等ハ皆曰ク防守
 ノ時ニ當リテハ其民ニ臨時ニ非常ノ稅額ヲ課シ防禦ノ備

ヲナスコトアリ而シテ攻入リタル敵ニテ此ノ如キ稅マテ
 モ其民ヨリ取立ル事ヲ得ルトスル時ハ防守ノ爲メニ臨時
 ノ增稅ヲ我國民ニ課スルニ差障ルノ恐レヲ生スルニ至ラ
 ントテ終ニ此議ヲ決セスシテ止ム
 第九章ニ付テハ議論甚タ多ク到底決スルニ至ラス
 此會議ニ於テ各國異議ナク同意ニ至リシハ第一部ノ第三
 篇第四篇第五篇也但シ五篇中第二十章ニ我占據シタル地
 ノ人民我形勢ヲ敵ニ報知スル時ハ問牒同様ニ見做ストノ
 條ヲ除ケリ其故ハ此條ヲ存スル時ハ人ノ報國ノ念ヲ害ス
 ル旨ヲ主張シタル議員多クハナリ日耳曼議員ハ此章ノ
 余論ニ揭グタル氣球ニ駕シテ信ヲ報スルモノヲ稱ストイ
 フ事ヲ除カント云ヒシカ一員モ同意セシモノナシ但シ日

修正ノ箇所

耳曼議員ハコレヲ間牒ト等シク見シトノ意ナリキ
 第六篇ハ第三十章ヲ少シク替ヘタルノミ其余ハ異議ナリ
 同意シタリ其替ヘタル所ハ軍虜ノ遁逃スル者ハ捕ムテ之
 ヲ殺スヲ得トイフヲ捕エテシプリ子ノ罰ヲ與セ又ソノ
 警備ヲ嚴ニス改メタルナリ(シシブリ子ノ罰トハ嚴重ニ懲
 治スルノ罰ヲイフナリ)
 第七篇ハ七章ナリシヲ變シテ一章トナシ傷者ノ事ニ付テ
 ハセ子ウ約定ノ旨ニ從ヒ取扱フヘシトナシ尙其中ニ改正
 ヲ加フヘキノ説アレハ衆議一定セス各々ソノ本國へ問合
 ハスヘキ事ト定マル是ニモ日耳曼議員ハ「ラザレット」院假
 ノ中立タルヲ拒ミ勝チタル方ノ隨意タランコトヲ主張セ
 リ然レハ瑞典并ニスウェーデン瑞西ノ議員堅ク拒ミテ其説ヲ破リ終ニ

決セヌシテ止ム
 第十四章ノ趣意ハ各議員大抵ソノ愛國ノ情ヲ剝キ國ヲ危
 フソスルツ方法ナリト云シカ日耳曼議員ハ此時モ又勝タ
 ル方ニ利ヲ寄セント議論シタレハ二等國ノ議員ハミナ力
 ヲ極メテ之ヲ拒ミ議決セスシテ止ム
 賦金課物レインツンノ件ハ決議ナシ
 第三部ハ字句ヲ少シ改メシノミニテ皆一致セリ但シ六十
 章ニ揭示スル降伏ノ條ニ戰法ノ名譽ニ負ケル降伏ハ結約
 スルヲ得ストイフ事ヲ添タリ
 此會議ノ初席ニ人民ハ各々其國ヲ守ルノ權アリトイフ事
 ヲ第二等國ノ議員ハ大ニ主張シ國ノ存亡ニモ關スヘキ切
 要ノ事件ナリト論セリ其論ノ起リハ比利時國ノ議員カ比

和蘭議員

國ハ小國ニシテ平時兵數極メテ少ナク而ノ舉國皆兵ユースキリオンノ制ナレハ若シ敵ノ侵襲ヲ受ルカ如キ事アラハ人民ニテ合力シテ之ヲ防クヘシ故ニ人民ヲシテ國ヲ守ルノ權理ヲ弱ク愛國ノ情ヲ剝カシムルカ如キ箇條ニハ同意スル能ハスト主張シ第二等國ノ議員ハ殆ント皆ソノ説ニ同意スル然レトモ大國議員ノ議會セサルヲ以テ其儘ニ打テ置キ他ノ合同一致スヘキ條ニ移リタリ末會ニ至テ再ヒ此件ノ議論ニ復シ異議益々甚シク和蘭議員云ラク和蘭ハ太利ヲ好ム國風ナレトモ他國ヨリ侵シ來ル事アル時ハ國民ニテ力ヲ極メ術ヲ盡シテ國ヲ守ルヘシ故ニ斯ル愛國ノ情ヲ害スヘキ箇條ハ和蘭政府モ人民モ共ニ服スル能ハスト而シテ且利スウェーデン時スウェーデン瑞西西班牙ハ之ニ同意ス然レトモ日耳曼議員ハ到底攻者

ノ權ヲ増シ守者ノ利ヲ抑エノ事ヲ目的トシタル付キ遂ニ決セスシテ止ム

記者曰ク以上ノ記事ハ明治七年比ノ外國新聞ヨリ折衷シタルトコロナリ此新聞ニ據リテ考フレハ此ノ度ノ會議ハ他日戰時公法ヲ確定スルノ初步ニシテ其ノ成績ハ纔ツカニ會議ノ記録ニ調印シタルニ止トマリ未タ次會ノ公議ハ何レノ日ニ起スヘキヲ期スルヲ得ス英ノ議員カ始終口ヲ閉シテ議論ヲ發セサルモ蓋シ英政府ニテ此會議ノ實効ナキヲ豫トスルニ出ルナラシカ願想スルニ三年前日耳曼澳地利魯西亞三帝集會ノ時ニモ歐洲大地ノ諸國ニテハ紛々ト之ヲ稱賛シ其成績ヲ待ナタレトモ當時英ノ「タイムズ」新聞ニハ此三帝各々其方向ヲ異ニスルニ付キ何様ニ盛ナル

築會ヲ外面ニ表スルモ決シテ其實効ヲ顯シ得ルカヲサル
 ノ説ヲ載セタリ而シテ今ヤ此戰時公法會議モ結局強者ハ
 攻撃ノ權利ヲ重シ弱者ハ防守ノ權利ヲ重シ初メヨリ
 各々其目途ヲ同フセス何ソソ協議ノ効ヲ同フスルヲ得ン
 ヤ英ノ論ヲ發セサルモ亦理ナキニ非ス然レトモ若シ幸ニ
 他日此公法ヲ認メ之ヲ實際ニ遵奉スルノ期ニ至ラハ獨リ
 歐洲人民ノミナラス實ニ全地球上ニ居住スル人民ノ康福
 亦云フベシ也

萬國交戰條規終

參考戒嚴令
 太政官第三十六號
 戒嚴令別冊ノ通制定ス
 右奉 勅旨布告候事
 明治十五年八月五日 太政大臣 三條實美

陸軍卿 大山巖代理
 參事院議長 山縣有朋
 海軍卿 川村純義
 司法卿 大木喬任

戒嚴令
 第一第 戒嚴令ハ戰事若クハ事變ニ際シ兵備ヲ以テ全
 國若クハ一地方ヲ警戒スルノ法トス

第二條 戒嚴ハ臨戰地境ト合圍地境トノ二種ニ分ツ

第一 臨戰地境ハ臨時若クハ事變ニ際シ警戒ス可キ地方ヲ區畫シテ臨戰ノ區域ト爲ス者ナリ

第二 合圍地境ハ敵ノ合圍若クハ攻撃其他ノ事變ニ際シ警戒ス可キ地方ヲ區畫シテ合圍ノ區域ト爲ス者ナリ

第三條 戒嚴ハ時機ニ應シ其要ス可キ地境ヲ區畫シテ之ヲ布告ス

第四條 戰時ニ際シ鎮臺營所要塞海軍港鎮守府海軍造船所等遽カニ合圍若クハ攻撃ヲ受クル時ハ其地ノ司令官臨時戒嚴ヲ宣告スルコトヲ得又戰略上臨機ノ處分ヲ要スル時ハ出征ノ司令官之ヲ宣告スルコトヲ得

第五條 平時土寇ヲ鎮定スル爲メ臨時戒嚴ヲ要スル場合ニ於テハ其地ノ司令官速カニ上奏シテ命ヲ請フベシ若シ時機切迫シテ通信斷絶シ命ヲ請フノ道ナキ時ハ直ニ戒嚴ヲ宣告スルコトヲ得

第六條 軍團長師團長旅團長鎮臺營所要塞司令官或ハ艦隊司令官艦隊司令官鎮守府長官若クハ特命司令官ハ戒嚴ヲ宣告シ得ルノ權アル司令官トス

第七條 戒嚴ノ宣告ヲ爲シタル時ハ直チニ其狀勢及ビ事由ヲ具シテ之ヲ大政官ニ上申スヘシ

但し其隸屬スル所ノ長官ニハ別ニ之ヲ具申ス可シ

第八條 戒嚴ノ宣告ハ彙ニ布告シタル所ノ臨戰若クハ合圍地境ノ區畫ヲ改定スルコトヲ得

第九條 臨戰地境內ニ於テハ地方行政事務及ヒ司法事務ノ軍事ニ關係アル事件ヲ限リ其軍ノ司令官ニ管掌ノ權ヲ委ヌル者トス故ニ地方官地方裁判官及ヒ檢察官ハ其戒嚴ノ布告若クハ宣告アル時ハ速カニ該司令官ニ就テ其指揮ヲ請フ可シ

第十條 合圍地境內ニ於テハ地方行政事務及ヒ司法事務ハ其地ノ司令官ニ管掌ノ權ヲ委ヌル者トス故ニ地方官地方裁判官及ヒ檢察官ハ其戒嚴ノ布告若クハ宣告アル時ハ速カニ該司令官ニ就テ其指揮ヲ請フ可シ

第十一條 合圍地境內ニ於テハ軍事ニ係ル民事及ヒ左ニ開列スル犯罪ニ係ル者ハ總テ軍術ニ於テ裁判スル刑法ニ依リテ處スル可シ

第二編

第一章 皇室ニ對スル罪。第二章 國事ニ關スル罪。第三章 靜謐ヲ害スル罪。第四章 信用ヲ害スル罪。第五章 官吏瀆職ノ罪。

第三編

第一章 第一節 謀殺故殺ノ罪。第二節 毆打創傷ノ罪。第六節 擲ニ人ヲ逮捕監禁スル罪。第七節 脅迫ノ罪。

第二章 第二節 強盜ノ罪。第七節 放火失火ノ罪。

第八節 決水ノ罪。第九節 船舶ヲ覆没スル罪。

第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪。

第十二條 合圍地境内ニ裁判所ナク又其管轄裁判所ト
 通路斷絶セシ時ハ民時刑事ノ別ナク總テ軍衙ノ裁判ニ
 屬ス

第十三條 合圍地境内ニ於ケル軍衙ノ裁判ニ對シテハ
 控訴上告ヲ爲スコトヲ得

第十四條 戒嚴地境内ニ於テハ司令官左ニ記列ノ諸件
 ヲ執行スルノ權ヲ存ス但其執行ヨリ生ズル損害ヲ要償
 スルコトヲ得ス

第一 集會若クハ新聞雜誌廣告等ノ時勢ニ妨害アリ
 ト認ムル者停止スルコト

第二 軍需ニ供ス可キ民有ノ諸物品ヲ調査シ又ハ時
 機ニ依リ其輸出ヲ禁止スルコト

第三 銃砲彈藥兵器火具其他危險ニ涉ル諸物品ヲ所
 有スル者アル時ハ之レヲ檢査シ時機ニ依リ押收スル
 コト

第四 郵信電報ヲ開緘シ出入ノ船舶及ヒ諸物品ヲ檢
 査シ並ニ陸海通路ヲ停止スルコト

第五 戰狀ニ依リ止ムコトヲ得サル場合ニ於テハ人民ノ
 家屋建造物船舶中ニ立入り檢査スルコト

第七 合圍地境内ニ寄宿スル者アル時ハ時機ニ依リ
 其地ヲ退去セシムヘシ

第十五條 戒嚴ハ平定ノ後ト雖モ解止ノ布告若クハ宣
 告ヲ受クルノ日迄ハ其効力ヲ有スル者トス

第十六條 戒嚴解止ノ日ヨリ地方行政事務司法事務及

參考戒嚴令終

七 裁判權ハ總テ其常例ニ復ス
 戒嚴令ハ以上ニテ至テ了ル蓋シ茲ニ此ノ令ヲ揭グル
 事モ之ニ我邦此令ヲ取ル始メテ之ヲ行ヒ且ツ此令ヲ本
 文交戰條規ノ參考トスベキモノ多キガ故ナリ看者之
 ヲ諒セヨ
 大谷熊太郎

明治十五年八月二十日出版御届
 同 十五年八月二十一日出版發兌

定價金二十錢

神奈川縣平民

編纂兼出版人

大谷熊太郎

芝區愛宕下町三丁目四番地
木瀧清類方寓

東京芝三嶋町十番地

山中市兵衛

全 銀坐三丁目九番地

山中孝之助

全 全 四丁目三番地

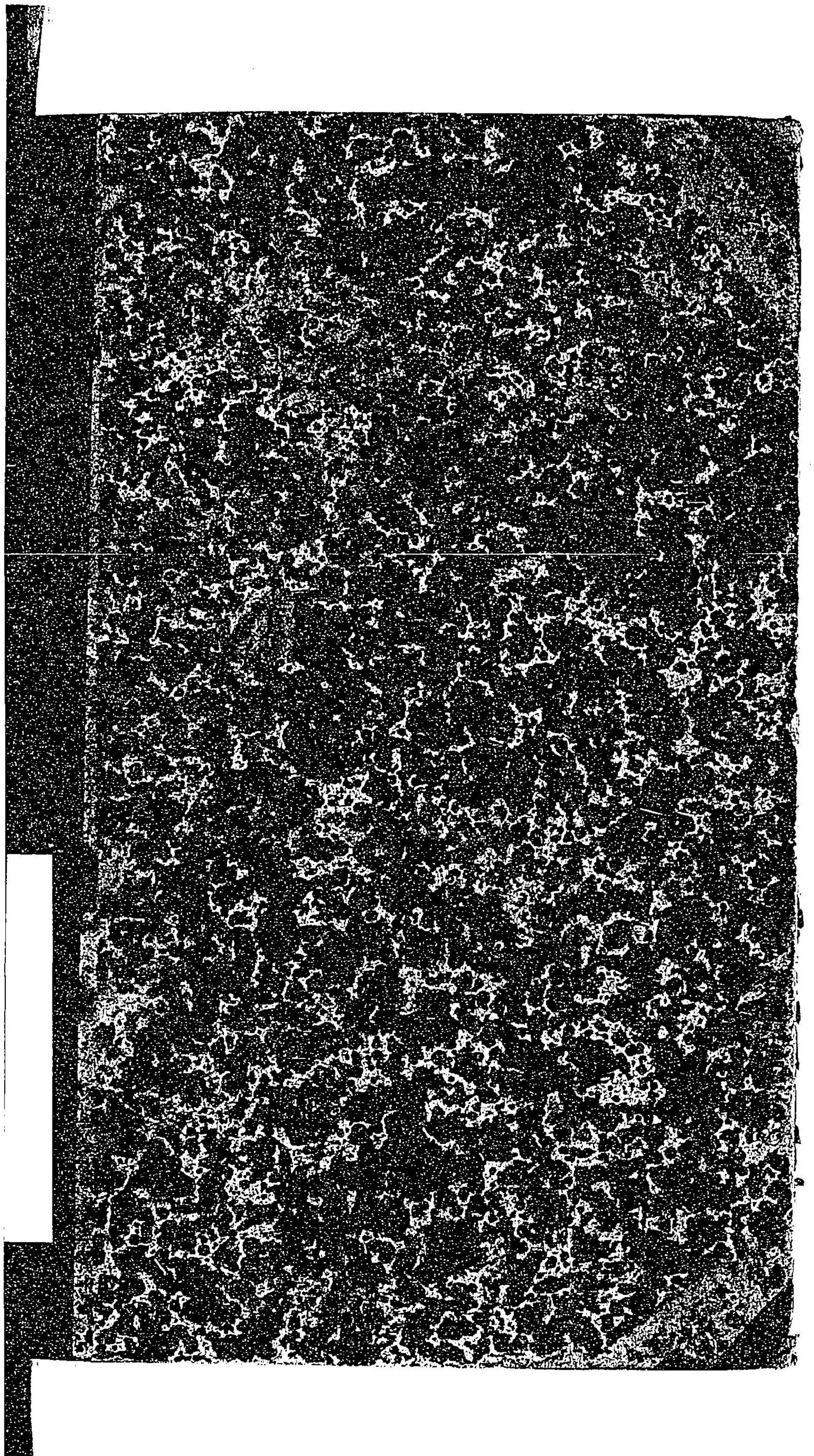
山中喜太郎

發兌

愛宕下町三丁目四番地

郁文堂

25
48



25

48

万国公義
交戰條規

039226-000-6

25-48

交戰條規 (万国公義)

大谷 熊太郎 / 編

M15.8

BCD-0029

